

12. 自然災害にしないための基本

自然災害は頻繁には遭遇しないにしても、被害があれば想像しない事態が広がるばかりではなく、最悪の場合には犠牲者も出てしまうものです。いつ来るかわからないものではありますが、この日本列島で生活する上では、自然災害に対して備えておくことは大切なことですが、意外と能天気な構えているというのが現実だと思います。もちろん、行政は様々な取り組みを実施していますが、それによって逆に住民の公共対策への依存度が増して、自分のことを丸投げしている状況になっていないでしょうか。

ここで、大事なことは自分自身ができることは何か、自然災害とは何かを理解しておかないと、いざというときに様々な行動ができずに呆然となってしまいます。その例としては、よく災害現場で聞く想定外だったとか、まさかここで起きるとは思っていなかった、これまで何も起きていないというような後の祭りのことです。

それでは、最低限なにを会得しておかないといけないのかを述べてみます。それは、自分が住んでいるところやその周辺が、どんなところで、どんな災害リスクがあるのかということを知ることです。そして、そのリスクが顕在化した時にはどのようなことが起きるのか、ということを知っておくことです。まずは、役所で公表している様々なハザードマップを見てみましょう。ハザードマップは地形や地質、これまでの災害履歴などを整理して様々な危険因子にもとづいて作られています。ハザードは地震、津波、火山噴火、土砂災害、液状化、洪水などで、なかにはもともとの自然地形を示しているものもあります。

ハザードマップは、これまでどのような災害があったのか、災害が起きる要素があるのかを示していますので、いわば人の体質のような診断書でもあります。例えば、いまは見えていないものでも、大きな自然現象があれば姿を現すかもしれないものを読み取ることもできます。

つぎに、災害があった時にどのようなことが起きるのかを知ること大切です。それを知らないと、二次被害や避難のタイミングや避難路での帰宅時に思わぬことが起きてしまうことにもなります。例えば、大雨が降れば氾濫や浸水が起きる危険性がありますが、それによって土砂災害が起きることもありますし、そこに地震などが重なって安全の確保が複雑になりかねません。特に、最近は今までは異なることが頻度や大きさに加えて、内水氾濫とか流木災害といったことが起きています。これらは経験が活かされないままに都市部や開発域を襲ってくるために、ある程度起きることを想定していないと対応に苦勞することにもなります。災害時の最も基本の基は地域で何が起きるのかを知っておいて、正確な情報に基づいての早期に避難するということになります。